イヤーチャップマンの小さな靴

◉ 大川内聖二

古い石畳が、曲がりくねって続く坂道を、子供たちが勢いよく駆け下り、道に沿ってたてこんだ古びた家々の窓辺には、四季折々の草花がさりげなく飾られ、通りを行く人の目を楽しませておりました。

イヤーチャップマンの小さな靴屋は、そんなこの町の、どこででも見かける路地が幾つか出会って、小さな広場を作っている角にありました。

店は、小さくひっそりとしていて、気をつけていないと、うっかり通り過ぎてしまいそうな佇まいでした。

店頭には、靴が飾られている様子もなく、よほど手入れが悪いらしく、すりガラスのように曇ったウィンドウに、

「イヤーチャップマン靴店」

と、よく見ると凝った作りの文字が彫り込まれておりました。

主人のイヤーチャップマンは、痩せた長身の男で、話す度にモゴモゴと動く口髭と、先端が大きな鼻の上に、使い古したロイド眼鏡をのせかけておりました。それが半分以上禿げあがった頭と相まって、一見ひどく老けた印象を与えましたが、まだ四十を少し過ぎたばかりの独り者でした。

彼は、非常に腕のいい靴職人でしたが、その外見から与える印象に違わず、職人にありがちな気難しい性格の持ち主でありました。　その上、靴に対する愛情が人一倍強すぎるため、お客が要求した注文を自分なりの考えで勝手に変えてしまうといった、店を構える者にとって致命的な悪い癖を持っていました。　しかし、当の靴屋は、その方が長い目でみてもらえさえすれば、きっと、どのお客にとってもよい結果をもたらすと信じきっている様子で、平然としていました。

店を訪れるお客の中には気が弱くて、この気難しい靴屋に言葉を返すことができないまま靴を新調する人もありました。そして、後日必ず、彼の判断に従ったことを喜ぶことになるのでした。

しかし、全てのお客に対して、靴屋の思いどおりに事は運びませんでした。新調の靴を仕立てようとする人は、大抵、今まで見かけた靴の中で、気に入った物をあれこれと心に思い描いて、靴屋の戸口に立つものでした。そして、それがほんの些

細な夢であっても、自分の好みをこのいかにも無愛想な靴屋に伝えようと、身振り手振りを交えて一生懸命になるのでした。

しかし、靴屋の主人は、そんなお客の必死の思いなどにはいささかも興味を示さない様子で、黙ってロイド眼鏡の奥から、目の前の人物を上から下まで、舐めるように観察するのが常でしたから、店にとって大切なお客は不愉快な思いを抱いて、店を出るのでした。そして、約束の日、期待と不安が入り交じった面持ちで、再び靴屋の扉をくぐった注文者は、決まって自分の意向とは掛け離れた靴を傍らに置いた靴屋の主人が、満足そうにパイプをくゆらす姿を見るのでした。

なかには怒りだして、そのまま帰ってしまう客もいましたが、大抵の善良な人は、あきらめたように深く溜息をついて、黙って代金を支払うと、肩を落として靴屋を後にしました。そして、家に帰ると、靴は一度も履かれることのないまま物置に放り込まれ、その人自身も二度と角の靴屋を訪れることはないのでした。

主人がそんなふうでしたから、今では靴を新調しようとして、イヤーチャップマン靴店を訪れる人など、滅多に見かけなくなっておりました。

しかし、相変わらず、この偏屈の靴屋は、その腕だけは確かでしたので、古靴の修理といった類のこの主人にとって、あまりありがたくない仕事の依頼だけは、なんとか続いておりましたから、貧しいながらも、街角の靴屋は細々と営まれているのでした。

イヤーチャップマンは、店の奥の作業場に座り込んで、古靴の修理を一つ一つ丁寧に仕上げながら、時折、その手を休めて、店のすすけたウィンドウ越しに、通りを横切る人々を眺めるのが、日課となっていました。

靴屋の主人の関心は、もっぱら人々の履いている靴に集中していました。

足早に通り過ぎる人の背恰好、歩き方の癖、服装の好み、年齢などを目敏く見抜き、

「ああ、あれじゃ甲が狭すぎる。それにヒールも高すぎるんだ」

などと呟き、その人に合った理想の靴を思い描くのが常でした。しかし、決してその理想の靴が、自分に注文されることがないと気づくと、さすがにこの気むずかしく自信家の靴屋も深く溜息をついて、肩を落としてしまうのでした。

肌寒い風が坂道を駆け下って、靴屋の窓をかたかた鳴らし、冬の到来を告げだした頃のことでした。

イヤーチャップマンは、日差しがすっかり弱くなったおかげで、昼からランプを灯さなくてはならない店の奥で、丹念に古靴の修理を続けておりました。一昨日、珍しく急な修理の依頼が重なり、手の早さでは右に出る者がいないこの靴屋でも、昨夜は、夜なべを強いられたのでした。

靴屋は、今朝もまだ暗いうちから、食事もとらず、作業場に座り続けて、一心に積み上げられた古靴の修理をしておりました。

ようやく、最後の一足に取り掛かろうとして、ほっと一息ついた時のことでした。なにやら、表通りで騒がしい声がしたので、靴屋は顔を上げました。

ウィンドウ越しに表通りを見ると、近所の男の子たちが、集まって騒いでいるのが見えました。

「また、あのいたずら者どもめ。しょうがない連中だ。また子犬でもいじめているんだろう」

ほんとうに、この町の子供たちは、まったく悪気はないのでしたが、元気が良すぎるのか、よくいたずらをして、大人たちを困らせておりました。そして、時にはいたずらの度が過ぎて、小さな動物をからかったりすることもあるのでした。

そんな時、見かけによらず本当は心根の優しいイヤーチャップマンは、彼らを叱りつけ、子犬や子猫たちををわんぱくどもの手から自由にしてやるのが常でした。

靴屋の主人は、手にしかかった最後の一足を置くと、子犬と引きかえにいたずら者たちに与えるために用意している砂糖菓子をポケットに突っ込み、長時間座り続け、疲れた重い腰をさすりながら立ち上がりました。

子供たちは、丸い輪を作って、その中心に向かって、なにやらはやしたてておりましたが、チリリンと鈴が鳴り、うす汚れた靴屋のドアが軋んだ音をたてながら開いて、暗い店の中から、ロイド眼鏡をかけた痩せた男が出てくるの見ると「ワーッ」と叫んで、いっせいに飛びのきました。

そして、それぞれ手に持った棒切れや小枝をすかさず背中に隠すと、気まずそう

にお互いの目を見合わせて、後ずさりしました。
イヤーチャップマンは、ロイド眼鏡の奥から、ジロリとわんぱくどもを見廻すと、ゆっくりと、わざと低い声で言いました。それは子供達が叱られる心づもりで、神妙な態度を取ろうとする間を充分に熟知した者だけができる話し振りでした。
「また、おまえたちか。弱い者いじめはしないといった約束で、このあいだ菓子を貰ったことをもう忘れたのか」
子供たちは、皆、下を向いたまま、黙ってしまいました。
「誰だ。一番年上の者は」
続けて靴屋の主人ににらまれると、真ん中にいた年上の子供が観念したようにうつむいて、一歩前に進みでました。そして、後ろ手にしていた小枝で、イヤーチャップマンの横手を指すと、いつもの元気をなくしたような小さな声で言いました。
「その子が、そこに座り込んでいたんだよ。見知らぬ子だったので、ちょっとからかっただけさ。ほんとになんにもしてないよ。いじめてたわけじゃないんだ」
そう言われて、イヤーチャップマンがふと横を見ると、店のウィンドウの端に小さな金髪の女の子が座り込んで、両手で目を覆い、肩でしゃくりあげておりました。
靴屋はその子の様子に思わず、傍らにしゃがみこみ、顔を覗き込むようにして、優しく話しかけました。
「どうしたんだい。いじめられたのかい」女の子は、首を横に振って、顔を上げました。
あざやかな金髪は、きれいなおさげに結われ、透きとおるような真っ白な頬を伝って、涙がひとしずく流れて落ちました。涙にうるんだ深く澄んだブルーの目が、靴屋の主人を真っ直ぐに見つめました。
その目が、あまりに深く澄んでおりましたので、イヤーチャップマンはいつになくどぎまぎして、その子の目をまともに見返すことができませんでした。ふと目をそらすと、その子の小さな靴は、底が割れ、ヒールが欠けておりました。
「坂道でころんだの。大切な靴が……」
女の子は、すすりあげるような小さな声で悲しげに呟きました。
いつも叱られてばかりで、てっきり今日も大目玉をくらうだろうと、覚悟していたわんぱくたちは、大好きな甘い砂糖菓子を頬張ると、すぐにいつもの元気を取り戻して、気むずかし屋だが、どの子もなぜか嫌ってはいない靴屋の主人に手を振り

ながら、坂道を下って行きました。

子供たちが去ってしまうと、イヤーチャップマンは、優しく女の子を抱き起こし、店に招き入れました。

靴屋はその時、店の黴び臭さを初めて感じて、ちょっと顔をしかめましたが、可愛いお客様を、まるで王女様にでもするかのように大切に扱い、店で一番立派な椅子に座らせると、いたわるように話しかけました。

「さあ、もう泣くのはお止し。暖かいココアをいれてあげるから。飲み終わって体がポカポカと暖まった頃には、大切な靴もすっかりもと通りになっているはずさ」

そう言って靴屋の主人は、とびきり上等で楽しみにとっておいたココアをいれて、お客様にさし出すと、自分は作業場に腰かけ、石畳のすきまにはさまって、無残に割れた靴の修理にさっそく取り掛かりながら訊ねました。

「名前はなんと言うんだね。そして歳は？」「メアリーって言います」

ココアをすすって、すっかり泣き止んだ女の子は、この位の年齢の子供に似合わない落ち着いた口調で答えました。

「明日で、ちょうど七歳になります」

靴屋は「ほお」と言うと、せわしなく動かしていた手をちょっと休めました。そしてこの時、頭に浮かんだ素敵なアイデアに我ながら満足そうに頷くと、メアリーに微笑みかけて続けました。

「メアリー。君はこのあたりでは見かけない子だけど、どこから来たんだい。そして、ここにはいつまで居るつもりだい？」

メアリーは、器用に動いて、見る間に靴を縫ってゆく靴屋の手先を、不思議そうに見つめながら答えました。

「ええ。わたし、遠くの山の村から来たんです。パパはそこで牧場を営んでいます。この町には、おばあさんが居て、毎年、わたしの誕生日を祝ってくれるんです。だから一年に一度は、汽車に乗ってこの町にやって来るんです」

そこまで言うと、メアリーは、ちょっと目を伏せて続けました。

「ママは駄目だって言ったんだけど、わたし町が珍しくて。独りであちこち見廻しながら歩いていたら、つまずいて転んでしまって。パパに買って貰った大切な靴を

……。きっとパパに叱られるに違いないわ」
「メアリー。心配はいらないよ。この靴を見て、パパが何を叱るって言うんだい」
そう言って、イヤーチャップマンは、すっかり修理されて、仕上げにクリームを塗って磨きあげられた茶色の靴を、メアリーの足元に揃えました。
「まあ。これは……」
メアリーは、目を輝かせました。ついさっきまで、割れてみすぼらしかった靴が、新品のように光っておりました。
靴屋の主人に手を取られて靴をはいたメアリーは、スカートをなびかせて、クルリクルリとその場で二、三度廻ってみました。
「まあ、欠けたヒールももと通りね。それにこの靴こんなに履き易くなかったわ」
先程まで泣いていた子とは思えないほどはしゃぐメアリーを、椅子に腰掛けて靴屋は、満足そうに目を細めて見ていました。
「おじさん。魔法を使ったのね。そうだわ。これはきっと魔法に違いないわ」
メアリーは、まだ信じられないと言った様子で、両足をキュッキュッと鳴らしながら、目をまるくして靴屋を見ました。
「ああ、そうさ。イヤーチャップマンは、魔法使いさ。でも、これはほんの小手調べだ。明日の午後、またこの店に来てごらん。おじさんの本当の魔法を見せてあげるから」
メアリーはすっかり元気になって、何度も何度も振り返って、手を振りながら、坂道を下って行きました。イヤーチャップマンは店の戸口に立って、メアリーを優しく見送っておりましたが、心はすでに先程浮かんだ素敵なアイディアの実行で弾んでおりました。

日がとっぷりと暮れて、さすがに骨の折れた大量の修理済の靴を届けると、イヤーチャップマンは疲れた体のままで、またも仕事場に座り込みました。そして、腕組みをして長いこと何事かを思っているふうでしが、やがて一心に仕事を始めました。その顔にはもう疲れた様子などなく、彼が素敵なアイディアを実行しようとしていることは明らかでした。
その夜「イヤーチャップマン靴店」の明かりは、一晩中消えることがありません

でした。

昨日約束した時間を待ち兼ねていたかのように、メアリーは店に飛び込むように入ってきました。昨日のお礼にと、朝早くから起きて摘まれた可愛い野の花々が、これも素敵なピンクのりぼんで結われ、どこの花屋にもないぐらい美しい花束となって、小さな手にしっかりと握られておりました。

「イヤーチャップマンさん。昨日は、本当にありがとう。おかげさまで、メアリーは、大好きなパパとママを悲しませずにすみましたことよ」

スカートの裾を指でつまんで、小さなレディは、ていねいにおじぎをしました。そしてその可愛い手から差し出された花束を、緊張気味で頬を少し赤らめた靴屋の主人が、コホンと小さく咳払いをして、直立姿勢で受け取りました。

靴屋は、丁寧にその花束を花瓶に生けると、王女様の手をうやうやしく取って、昨日にはなかった、凝った縁飾りのあるビロード地の布が掛かった椅子に導きました。

王女様にふさわしく、礼儀正しく腰掛けたメアリーは、昨日とはうって変わった店の様子に気づいて目を見張りました。

「あら、これはどうしたこと。昨日のお店とは、とても思えないわ」

古ぼけて、すすけていたはずの店は、すっかり様変わりしていました。

何年も拭かれたことのなかったウィンドウは、すっかり磨きあげられ「イヤーチャップマン靴店」の文字が鮮やかに浮かびあがった向こうに、通りが克明に見渡せました。

床の木もピカピカと光るほどでしたし、どのテーブルや椅子にも真新しいカーテンとお揃えの凝ったビロード地の布が掛けられていました。壁も塗り変えられたように真っ白で昨日まで、店の隅に無造作に積みあげられていた見本の靴たちは磨きあげられ、整然と行儀よく陳列棚に収まっておりました。

「昨日、言ってらした本当の魔法って、これのことだったのね」

イヤーチャップマンは、いつものズボン釣りの作業着ではなく、こぎれいな一張羅の背広に品のよい蝶ネクタイをして、湯気のたったいい香りがするココアを、新品で金の縁どりがついたカップに注ぎながら、ちょっと気取った口調で答えました。

「いやいや。イヤーチャップマンの魔法は、まだまだこんなものではありません。このココアも、魔法のひとつ。昨日のにも増しておいしいはずだよ。さあ、召しあがれ」

メアリーは、一口すすって、本当に魔法のココアだと思いました。いままでこんなにおいしいココアを飲んだことなどなかったからです。

メアリーは、すっかりうれしくなってしまいました。そして、いつのまにか、自分がとってもおしゃべりになっているのに気づきましたが、もう止めようとしても止められなくて、お気に入りの牧場での出来事をつぎつぎと靴屋の主人に話しだしました。

今年、生まれたばかりの子牛が、メアリーの後をくっついて歩いて、決して離れようとはしないこと。ここらの町では咲かない高原の名もない花の目の覚めるような美しさ。朝雄鶏の啼く声で、眠たい目をこすりながら、目覚め、パパについて薄もやがかかった牧場に向かうと、もうとっくに起きている牛たちが、メアリーの来るのを首を長くして待っていること。そして、パパやママを手伝って、一日汗を流した帰りには、真っ赤な夕焼けで紫に染まった山々を背景に、教会の鐘がおごそかに響きわたり、家族そろってひざまずいて、今日一日の無事を神様に感謝して祈ることなど、メアリーは一気に語りました。

イヤーチャップマンは、ブルーの目をキラキラと輝かせて、身振り手振りを交えたいかにも感受性が豊かな子供らしいメアリーの話を、心から楽しんで聞いていました。そしてメアリーの素直さを生む、大自然に囲まれた牧場風景を、まるで眼前に見るかのように心に思い描いておりました。

時の経つのを忘れて、ふたりは、テーブルをはさんで、話し込んでおりましたが、夕日が何年ぶりかに磨きこまれた窓から淡い光を投げかけ、ふと我に帰った靴屋が言いました。

「メアリー。君の話をもっともっと聞いていたいんだが、今晩は、おばあさんの家で誕生パーティがあるんだろう。さあ、遅れるといけないよ」

お話に夢中になっていたメアリーは、そう言われ、外の様子を見て驚きました。

「まあ、なんてことでしょう。わたしったら夢中で話し込んでしまって。もう、こ

んな時間だわ。急いで帰らなくては、チャップマンさん、長居をしてごめんなさいね」
メアリーは、椅子から降りると、丁寧に主人にあいさつすると、あわてて出て行こうとしました。
靴屋の主人は、この小さなお客様をほんの少しだけと引き止めると、きれいなリボンがかけられている箱を取り出し、優しく言いました。
「さあ、メアリー。これこそが、イヤーチャップマンの本当の魔法だよ。これを履いて、遅れないようにお帰り」
蓋を開くと、真っ赤な色をした小さな靴が出てきました。
花と蝶々を繊細にかたどった、可愛い飾りがついた靴は、窓から差し込む夕日を受けてキラキラと赤く輝きました。
見たこともない美しい靴を、メアリーは、声も出せずに大きな目をいっそう大きく見開いて見つめました。イヤーチャップマンは、そんなメアリーの表情に満足そうにしながら、メアリーの愛らしい足元にひざまずくと、この子のために、昨夜は寝ずに作った自信作を履かせました。
靴は、メアリーの足にピッタリでした。
そして、まるで主人の足におさまったことを喜んでいるかのように輝きを増しました。靴屋に導かれて、メアリーはおそるおそる歩いてみました。すると、靴は、キュッキュッと快い音をたて、まるで何年も履き慣らした靴のように、すぐに足に馴染みました。
「さあ、暗くならないうちに帰らなくちゃ。皆が心配するといけないから。でも、あんまりあわてて、転ぶんじゃないよ」
メアリーは、優しい靴屋に抱きついて、その頬に可愛いキスをしてお別れをしました。「魔法使いのイヤーチャップマンさん。あなたの魔法って、とっても素晴らしいわ。この靴は、メアリーの宝物ですもの。なによりも大切にします。ほんとうにありがとう」
そして、なごり惜しそうに、目を伏せて言いました。
「もし、あなたさえよかったら、毎年、誕生日に、このお店を訪ねていいかしら」
にっこりと微笑んだ靴屋の主人は、優しくメアリーを送り出しながら、答えました。
「ああ、いいとも。きっと、訪ねておくれ。毎年、新しい魔法できっと気にいる靴

を作って待っているから、また牧場の楽しい話を聞かせておくれ」

それからというもの、石畳の坂道に古い家が立ち並んだ街角の「イヤーチャップマン靴店」は、この小さな町になくてはならない店になりました。

靴屋の主人は、相変わらず仕事熱心で、気むずかしい所はありましたが、その腕は、以前にも増して確かなものでしたし、少し前のこの店なら、きっとへそを曲げられて、不愉快な思いをしたはずの無理な注文に対しても主人はいやな素振りも見せず、客の気に入る靴に仕上げてくれるようになっていました。しかも、主人の考えが、全く入っていない訳ではなく、所々、手は加えられており、それが決まって、お客の意向をよりよくするものでしたので、誰もが期待以上の靴を手にすることができるのでした。

そんな店の評判は上々で、この町に限らず遠い町から、はるばる「イヤーチャップマン靴店」の噂を聞き訪ねて来る人も多くなりました。

こぎれいになった靴屋の店頭には、他の店では見かけない斬新なデザインの靴が並べられ、道行く人は必ず一度は立ち止まって、ウィンドウを熱心に眺めて行くのでした。

以前にも増して働き者になった靴屋は、どんな雨の日も、風の日も店を閉じることはありませんでしたが、毎年決まって、冬の初めには、半月程もの間、店を閉ざすのでした。そして、この時期ばかりは、どんなお得意様が無理をいっても、断ってしまうのでした。この期間、靴屋は、かたく閉ざした店の奥にこもって、なにやら仕事をしているようでしたが、誰が呼んでも、決して出ては来ませんでした。

たまたま運悪く、その半月の間に、遠い町から訪ねて来る人もおりましたが、そんな時、町の人々はさも気の毒そうに言うのでした。

「気の毒にねえ。でも、気を悪くしないでやってくださいな。イヤーチャップマンは、今年も『大切なメアリー』の為に、新しい靴を作っているのさ。また、出直しておくれでないか。メアリーと会った後のこの靴屋は、そりゃあもうご機嫌で、とびっきりいい靴を仕上げるんだからさ」

メアリーは、毎年、誕生日には必ず靴屋を訪ねてきました。
そして、その一年間に起こった牧場の出来事や、学校での新しい友達のことなどを、せきを切ったように、それはそれは、詳しく語るのでした。その様子は、まるで靴屋の主人に語るために、この一年を過ごしてきたかのように見えました。
事実、メアリーは美しい山々に囲まれ、牧場が広がる山の村での日々で、特別楽しいことや、うれしい出来事に出会うと、そばにいる人が驚いて、目をまるくして自分を見るのも構わず、手を叩いてこう言うのが癖になっていました。
「まあ、なんて素敵なんでしょう。チャップマンおじさんに、話してあげなければ」
おかげで、一年に、たった一度しか会わないにもかかわらず、イヤーチャップマンは、メアリーのことだったら、女の子らしく、こぎれいに飾られた彼女の部屋の、お気に入りのカーテンの柄から、一里半も歩いて通う小さな山の学校で、だいの仲良しのおしゃまなセーラが、授業中に居眠りをして、寝言で先生の悪口を言って立たされたことまで、知らないことはないといったほどになっていました。
こうして、冬が近づいた頃に訪れるメアリーの誕生日は、イヤーチャップマン靴店にとって、一年に一度のとっても幸せな一日となるのでした。
この日ばかりは、いつも、通りを派手にはしゃぎ廻る近所の子供たちも、そっと靴屋の前を通りすぎ、町中がイヤーチャップマンと幸せな日を味わっているようでした。
そして、夕暮れが近づくと、正装した靴屋の主人は、年ごとに見違えるほど眩しい乙女に成長して行くメアリーが、まだ、話し足りない様子でいるのを優しく制して言うのでした。
「さあ、もうこんな時間になってしまった。メアリー、今年のイヤーッチャップマンの魔法を見ておくれ。きっと、去年のよりも、気に入るよ。今年は、魔法に一層磨きをかけたのだから」
そして、メアリーのいないこの一年間に、練りに練った特別製の靴を、この店で一番のお客さまに披露するのでした。
「まあ。なんて、素敵なんでしょう」
メアリーのブルーの瞳が、それはそれは美しく輝くと、イヤーチャップマンは緊張気味だった胸をほっとなでおろすのでした。そして、その顔は、さも満足げにほ

ころび、真新しい靴を履いたレディを優しく見守るのでした。
それは、イヤーチャップマンにとって、一年間待ちに待った瞬間でした。この日のために靴屋の主人は、くる日もくる日も、いままでどこにもない、美しい靴のデザインを練ってきたのでした。

毎年、毎年、愛するメアリーの成長に合わせて、イヤーチャップマンは新しい靴を生み出しました。
メアリーの喜ぶ顔見たさに、苦労して新しい靴を考え出すことが、いつしか、この気むずかしいながらも実直な靴屋のなによりの楽しみになっておりました。しかし、それは同時に、当の靴屋自身は全く気づいてはおりませんでしたが、靴作りに励む者にとって、最も大切な修練となっていたのでした。
おかげで「イヤーチャップマン靴店」はその仕立ての良さもさることながら、斬新な美しさの中にも気品漂う、独特のデザインをもつ靴を生み出す店として、近隣の町どころか、国中で知らぬ者はないといった存在になっていました。
町の名士たちの紹介状を持って、はるか遠方の地から訪ねて来る人も後を絶たなくなり、さすがのこの気むずかし屋で、派手なことを好まない靴屋の主人も、店を広げ、店員を雇わざるをおえなくなりました。
しかし、皆がすすめても、靴屋は店を改装しようとはしなかったので、奥が広がったとはいえ、通りに面したウィンドウは昔からの店の雰囲気そのままでした。
そして、靴屋は、どんなに忙しくても、冬の始めの半月間、店を閉じる習慣を改めることはしませんでした。

その年も、北風が冷たくなった頃、町は静かで、優しく角の靴屋を包み、冬の始めのその日を共に楽しんでいるようでした。
しかし突然、その静けさを破って、イヤーチャップマン靴店のガラス戸が派手な音をたてて、開かれました。
驚いた町の人々が、窓から身を乗り出して通りを見ると、そこには、もうすっか

り美しい淑女となったメアリーを、初老の靴屋が抱きあげて踊っている姿が、夕日を背に美しいシルエットを作っていました。

「メアリー。おめでとう。ほんとうにおめでとう。幸せになるんだよ。結婚式には、きっと招いておくれ。そして、その日花嫁は、このイヤーチャップマンの魔法の全てを傾けた最高の靴を履くんだよ」

その靴屋の言葉に町中から歓声が起こり、通りには窓から投げられる花が舞いました。

その美しい花吹雪の中、イヤーチャップマンは、目に涙をいっぱいに浮かべた愛するメアリーをいつまでも抱き締めていました。

町の教会で、結婚式は盛大にとり行われました。この町出身の青年実業家と結ばれたメアリーは、純白のドレスに身を包み、その目を見張るような美しさには、誰もが溜息をつくばかりでした。

そして、その美しさを一層引き立てたのがイヤーチャップマンが手によりをかけた純白の靴でした。

その靴は、まるで、最高の絹糸で編みあげられたかのようにしなやかで、水に濡れた白鳥の翼が朝日を浴びた時のようなきらめきをもって輝きました。そして、甲にほどこされた純白のブーケの飾りは、月の光をいっぱいに受けた真珠でも見るかのような、気品に満ちた淡い輝きを放っておりました。

誰もが、その新婦のあでやかさにみとれ、その靴の美しさに驚嘆しました。どの母も、自分の娘にあの靴が似合うような淑女に育ってほしいと願い、どの娘も、その靴を履いて純白のドレスをまとう日を夢見て、胸をときめかせました。

やがて、皆の歓声に包まれ、愛する人と並んで手を振る幸せいっぱいの花嫁を乗せた馬車が、次第に遠ざかって行くのをイヤーチャップマンはいつまでも見送っていました。

「イヤーチャップマン靴店」は、押しかけるお客の列で、息つく暇がないほどの繁盛ぶりでした。

メアリーの結婚式で、新婦の素晴らしい靴を見た人々の評判が、口から口へと伝わり、この靴屋の腕の非凡さは、いまや国中の誰もが認める確固たるものとなっていました。

しかし、肝腎のイヤーチャップマンは、すっかり元気を失くしていました。メアリーが嫁ぐと間もなく、夫の仕事の関係で遠い外国に旅立ってしまったからでした。

心待ちにしていた冬の誕生日、メアリーはとうとう姿を見せることなく、代わりに、訪れることができないことを詫びる淋しい手紙が、靴屋の主人のもとに届いたのでした。

一年で最も楽しい気分で過ごすこの時期、イヤーチャップマンは、夜毎、まんじりともせず過ごしました。メアリーからの手紙と丹精込めて仕上げた既婚者むけの新しい靴を見つめながら。

それから何年かの月日が流れ去りました。相変わらず、その町の角の靴屋は、遠方から来る人々でにぎわっておりましたが、以前の靴屋を知る町の人々は、最近の靴屋の主人の精彩のなさをはっきり感じておりました。

近所のわんぱくたちが、どんなに騒いでも靴屋の扉が開かれ、長身の主人が姿を現すことはありませんでした。

人々には、靴屋が元気をなくした気持ちが痛いほど判りましたので、時折、ウィンドウ越しに中を覗き込んだりしてみましたが、主人は決まって仕事場に座り込んでうつむいているばかりなので、見ている方がつらくなり、目をそむけてしまうのでした。

ある日、とうとう、靴屋の主人は、病の床についてしまいました。人々は、この身寄りのない、今ではすっかり年老いて見える独り者の心情を憐み、交代で、よく尽くしてくれましたが、そんな隣人たちの優しさのかいもなく、イヤーチャップマンの体は日増しに衰えていきました。

見るに見兼ねた人々は、是非ともと、医者に回復を願いましたが、医者自身も困り果てた様子で、病は気からで、与える薬ももう及ばないと答えるのでした。

とうとう、あと幾日と、医者が匙を投げる日が来ました。誰もがまだ早すぎると惜しみましたが、生きる張りを失った男には、もはや食事をとる気力も残されてお

りませんでした。
気づかう隣人に感謝しつつも、靴屋は、ひとりにしてほしいと望みました。
静かに目を閉じると、まぶたに、初めてメアリーと出会った日の光景が浮かびました。そして、もう何度も思い描いた大自然の山々を背景にした美しい緑の牧場の中で、幼いメアリーが子牛とたわむれる姿が生き生きと輝きました。
そして、耳には、鈴の音のように心地よいメアリーの弾んだ声が響きました。
「イヤーチャップマンさん。そして、こんなこともあったのよ……」

いつしか、彼は、深い眠りに落ちました。体中の力が抜けて行くのが感じられました。しかし、それはとても心地よい眠りでした。　ふと、深い眠りの奥底で、彼を呼ぶ声が聞こえたような気がしました。それは、何度も繰り返され、やがてはっきりと彼の耳に響きました。彼はその声に、薄れ行こうとする意識を傾けました。
「ああ。メアリーだ。メアリーの呼ぶ声だ」

ゆっくりと目覚めた彼の枕元に、目に涙をいっぱいに浮かべたメアリーの顔がありました。彼女は、病人の手をしっかりと握りしめて、心配そうな様子でしたが、病人の目が開かれたのを見ると、ほっとしたように、にっこりと微笑みました。
「ああ。気がついてよかったわ。イヤーチャップマンさん。わたしよ。メアリーよ。わかるでしょう」
「ああ、メアリー。よく来てくれた。もう、会えないとあきらめていたよ。どんなに会いたかったことか」
イヤーチャップマンは、まだ夢の続きを見ているかのように、ぼんやりとした目を向けて呟きました。
「ごめんなさい。ほんとうにごめんなさいね。
こんなつもりではなかったの。誕生日にはきっと訪ねるつもりでいたのよ。でも、あれから急に主人の仕事がうまくいかなくなって、外国に居る身では、どうしようもなかったんです。それが、やっと順調になって、喜んで飛んで帰ってきたら、おじさんがこんなことに……。お願い、元気になってください。そして、わたしを許してください」

涙ぐむメアリーは、少しやつれて見えましたが、その目は確かに愛するメアリーの美しい目でした。イヤーチャップマンの顔には、こころなしか赤みがさしたようでした。

「ああ、メアリー。何を許すと言うのかね。こうして帰って来てくれたのに。それより、どうしてそんな大変なことがあったのなら、知らせてくれなかったのだ。店をたたんででも駆けつけたものを」

メアリーは、涙をあらたにして、靴屋の手を一層強く握りました。

「ああ、チャップマンおじさん。やっぱり、あなたはそう言ってくださる。でも、わたしは、この子の為にも出来るかぎり頑張ろうって心に決めていたのです。それが、母親のつとめなのですもの」

そう言って、メアリーは、傍らに寄り添う娘を抱き寄せて、靴屋の前に立たせました。イヤーチャップマンの目が輝きました。そして、みるみる、青ざめていた頬が紅潮し、メアリーを握り返す手に力が蘇ってきました。

メアリーに促され、丁寧にお辞儀をする幼い娘は、あの初めて会った日、イヤーチャップマンの店の前に座りこんでいたメアリーそのものでした。

おさげに結われた金髪、透きとおるような白い頬、そしてなによりも、少し不安げに、しかし、真っ直ぐに自分を見つめるその深く澄み切ったブルーの目。

思わず、イヤーチャップマンは、両手をあわせて神様に祈りました。

「この子にも、おじさんの魔法の靴を作ってやってください。わたしは、どんなに苦しい時もあの靴を履くと元気が出て、そして、こうして幸せをつかめましたもの」

メアリーの言葉は、イヤーチャップマンの心に深くしみいりました。そして、体の底から、ふつふつと生気が湧きいでるのを感じました。

「ああ、作るとも。とっておきの魔法がまだまだあるんだ。それに、この子がやがて、ママのような美しい花嫁になった時、このイヤーチャップマンが靴を仕立てなくて、誰が仕立てられると言うんだい。メアリー、心配かけてすまなかった。でも、もうすっかり大丈夫だ。ほんとうにありがとう」

メアリーは、ベッドの上で、体を起こしたイヤーチャップマンと抱きあいました。その傍らで、靴屋にとっては昔のメアリーそのままの幼い子が、二人の様子を見て、かわいい歯をみせて微笑みました。

それに気づいたイヤーチャップマンは、その子の頭を優しく撫でて言いました。

「ところで、とっても大切なことなんだが、この子の誕生日はいつなんだい」

坂道が交差する角の「イヤーチャプマン靴店」は、今日も往来の人々が立ち寄り、とても賑やかで、店の奥では、すっかりこの町の名物になった、ちょっと頑固で気のよい靴屋の主人が、元気に自慢の腕をふるうのでした。

そして、初夏のこの頃に、毎年恒例となっている

「勝手ながら、明日よりの一カ月間、臨時休業です」

と書かれた看板が、明日あたりにはきっと店先に出されるのです。

それを見た町の人々は、今年もメアリーとその可愛い娘が、この町を訪ねて来る日が近づいたことを知って、顔を見合わせて、にっこりと微笑み会うのでした。

第10回文芸思潮銀華文学賞 童話賞佳作受賞作品

大川内聖二

大阪市生れ。鹿児島大学工学部建築学科卒業。一級建築士。大阪府堺市で父の経営する建築設計事務所に勤務し、主に大規模公共建築（大学、庁舎、病院、音楽ホール等）を設計、監理する。その後、鹿児島県の霧島高原に移住し、独立。童話・児童文学・小説等幅広く（五十数作程）執筆。著書に「じゅうごやの　ごほうび」（ひかりのくに株式会社より出版）また、兄と妹が絵を描いた自費出版絵本「ポッテじいさん　パドルトじいさん」のお話も担当する。